

春秋彩

Syunjusai

特集 世界に伸びる …………… 2

- 活躍する卒業生 …………… 7
- 研究活動紹介 …………… 8
- 国際交流 …………… 9
- 地域連携 …………… 10
- 大学の動き …………… 12
- 熊本県立大学未来基金寄附者御芳名 …… 13
- 後援会便り …………… 13
- 活き活き元気種 …………… 14
- 人事情報 …………… 15
- おすすめの1冊 …………… 15



 熊本県立大学

春秋彩とは 万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2016.03

vol. 44

あいさつ



学長
古賀 実

この3月末をもちまして6年間の学長任期を満了し、併せて退職いたします。環境共生学部設立要員として平成9年、当時の生活科学部に赴任して以来19年が経ちました。この間、教養科目の「環境と生きる」や専門科目の「基礎化学」「環境分析化学」「化学実験」などを楽しく担当させていただきました。中でも熊本の素晴らしい自然、社会、文化を教育資源として活用し、学生諸君が地域社会に出かけ、地域の現状を体験し、人々と地域課題の解決に向けた方策を探る本学独自の「もやいすと」育成プログラムを創設しました。このプログラムは昨年度から全学共通教育「地域もやいすと」「防災もやいすと」科目として、全学生が学ぶ必修科目へと発展させていただきました。担当の教職員、御支援いただく地域の皆様方に深く感謝申し上げます。

人口減少、とりわけ18歳人口の減少に伴い、大学を取り巻く環境は益々厳しさを増しています。本学では、文部科学省科学研究費補助金へ全教員が応募のうえ、着実な研究成果に結びつけるとともに、大学教育改革に対する文部科学省補助事業等にも積極的に取り組んできました。70年近い伝統の上に新たな活力を加え、熊本県立大学のさらなる飛躍を期待しています。

春秋彩
Syunjusai

特集

Feature

世界に伸びる



世界に伸びる 人材の育成に向けて

熊本県立大学は、公立大学の役割として地域社会で活躍する人材の育成を通じ、地域社会へ直接的に貢献することが期待され、これまで多くの有為な人材を輩出してきました。一方、急速に進展するグローバル化の波は地域社会にも大きな変化をもたらし、大学においてもグローバル化社会にも対応できる人材の育成、即ち地域限定ではなく国際社会においても活躍できる人材づくりが求められています。

本学では、国際化推進に向けた「国際交流ビジョン」を策定して、主にアジア、太平洋地域にある大学と交流協定を締結し、学生交流・研究者交流の推進、交換留学生及び短期研修団の受入れ・派遣、合同シンポジウムの開催などを進めています。韓国・祥明大とっては平成元（1989）年に姉妹校協定を締結後28年間にわたり着実な交流を続けています。また、米国・モンタナ州立大学ピリングス校とは交換留学生・短期研修団の派遣などを進めています。海外学生の受入れに当たってはホストファミリーとして市民の方々にご協力をいただいています。韓国やモンタナ州でも同様に、受入れに市民レベルでご協力をいただき、毎年PUK-Students（熊本県立大学学生）の訪問を楽しみにされている家庭も多いと聞いています。若者を通じた国際親善、国際理解に繋がっているのではと考えます。

本学では国際交流を促進する支援を拡充してきました。海外留学・研修を経験する学生の数は平成25年度64名、平成26年度109名と最近飛躍的に増えてきました。国や地方財界の支援による海外派遣事業「トビタテ! 留学JAPAN」プログラムにも果敢に挑戦しています。また、グローバル人材に必須の英語運用能力の向

上、LLC (Language Learning Commons) における英語学習環境の整備、「熊本で世界と向き合う」国際シンポジウムの開催などを通じ国際的センスの醸成を図っています。世界を舞台に活躍する卒業生も着実に増えていきます。学生諸君のチャレンジ精神に期待するとともに応援して参ります。

(学長 古賀 実)

熊本県立大学における国際交流

「国際性の推進」を理念のひとつに掲げる本学では、地域と、それにつながる世界へ開かれた知的創造の拠点となるべく、姉妹提携を締結している韓国・祥明大専科や、学生交流協定を締結している米国・モンタナ州立大学ピリングス校との交流を中心に、本学の規模・特性を活かした国際交流活動を推進しています。

学生交流協定締結による交流



韓国・祥明大専科



米国・モンタナ州立大学ピリングス校

学生交流協定締結校

H9(1997).9
H10(1998).5

韓国・祥明大専科 (H元(1989).10に姉妹提携)
米国・モンタナ州立大学ピリングス校

◆交換留学生の派遣

・祥明大専科には1年間、モンタナ州立大学には9か月の単位互換及び授業料相互不徴収の留学制度で交換留学生を派遣

◆短期語学研修団の派遣

・祥明大専科には1週間、モンタナ州立大学には3週間の語学学習と文化体験を目的とした研修団を派遣

◆学術シンポジウムの開催

・祥明大専科とは毎年、文学部を中心に研究者の交流を目的とした、学術シンポジウムを実施

◆交換留学生の受入れ

・祥明大専科・モンタナ州立大学から、単位互換及び授業料相互不徴収の留学制度で交換留学生を受入れ

◆短期語学研修団の受入れ

・祥明大専科・モンタナ州立大学から、語学学習と文化体験を目的とした研修団を受入れ
・学生がホストファミリーとなり、家庭の中でも国際交流

その他の国際交流

◆カリキュラムにおける国際教育

・運用能力向上を目的とした英語科目(「Intensive English」等)、初修外国語(ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語)科目の開講、また英語学習ソフト導入による自主学習体制等を含めた外国語教育を展開
・国際理解を目的とした教養科目の開講(「現代の国際関係」「国際教育論」「東アジア文化圏の理解」等)
・より深い国際的な知識と実践力を修得する専門科目の開講(文学部:「異文化コミュニケーション論A、B」、英語英米文学科の現代英語運用科目、環境共生学部:「Science English」、総合管理学部:「国際システム論」「アジア地域論」等)

◆日本語教育課程の教育実習

・日本語教師を目指す学生が、韓国・祥明大専科や中国・広西大学等の協定校で教育実習(文学部)

◆海外留学対策講座・留学助成

・留学を希望している学生に対し、海外の大学での授業や生活についてのアドバイス等を行う講座を実施
・学生交流に関する協定に基づき、派遣される交換留学生については「短期派遣留学生支援奨学金」を、文学部英語英米文学科の一定期間以上の留学・研修を行う学生に「小辻梅子奨学金」を支給
・海外への留学・研修を行う学生(後援会員)に、期間に応じた助成金を支給

◆外国人留学生の受入れ

・これまでインドネシア・韓国・台湾・タンザニア・中国・ブラジル・ベトナム・モンゴルからの留学生を学部生、大学院生、研究生等として受入れ

◆学術交流協定校との交流

・台湾・国立台北科技大専科、韓国・ソウル市立大学、タイ王国・カセサート大学等の協定校と教員や学生が共同研究やシンポジウム等を実施

世界に伸びる学生とは

「世界に伸びる学生とは」をテーマに、古賀学長コーディネートのもと、本学のモットーである「世界に伸びる」を実践する学生に集まっていただき、本学学生の考える「国際交流」について、生の声を語っていただきました。



【座談会メンバー】(敬称略。順不同。)

- 古賀 実 学長(コーディネーター)
- 平尾 大地(英語英米文学科4年:モンタナ州立大学ピリングス校に交換留学)
- 北村 美奈実(総合管理学部4年:韓国祥明大に交換留学)
- 松本 幸太(総合管理学部4年:米国ホームステイ、豪州ワーキングホリデー経験)

古賀学長(以下「学長」): 皆さんお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。このたびは、「世界に伸びる学生とは」をテーマに、海外にチャレンジしている皆さんに集まっていただき、「留学」にまつわるエピソードや留学して成長した点、後輩へのメッセージなど“国際交流とは何か?”について、ざっくばらんに語っていただきたいと思います。それではまずは自己紹介から。

平尾大地(以下「平尾」): 私が留学したのが3年前の平成25年、学生交流協定(大学単位の互換や授業料の相互不徴収が可能となる制度)を締結している米国モンタナ州立大学ピリングス校の交換留学生として、1年間学んできました。また、内閣府が主催する「第42回東南アジア青年の船」の日本側参加青年40人の一人として、11月から12月にかけて41日間東南アジア各国を訪問してきました。



平尾 大地

北村美奈実(以下「北村」): 私は昨年3月から約1年間、同じく本学との学生交流協定先である韓国祥明大に交換留学生(日本語文学科在籍)として行ってきました。もともと韓国に興味があり、本学へ進学したのもこの交換留学制度があったからなんです。そのような思いもあって今回留学が実現しました。

松本幸太(以下「松本」): 僕は日頃から海外で英語を勉強したいという思いを持っていたんですが、近所の英会話スクールの方

のご縁で、米国にホームステイができることとなり、3年生の時に休学して、3ヶ月間米国の語学学校に行くチャンスがありました。その後、オーストラリアにワーキングホリデーという制度を活用して、バナナ農園で収穫の仕事しながら1年半ほど現地に滞在しました。あっという間の充実した2年間でした。

「語学の壁」は自分の殻をまず破ること

学長: 国際交流の最大の壁となっているのが「語学力」ですが、みなさんはどのようにしてそれを乗り越えてきたのでしょうか。

松本: まず「How are you?」と言うのが怖かったですね。学校では「I'm fine, thank you. And you?」といえば会話が成立します。でも実際は互いに会話を続けなければなりません。僕はとにかく今日の天気でもいいから会話を続けていこうと思いました。それが語学力向上や、コミュニケーションへの恐怖を克服するきっかけになりましたね。

学長: 自分の殻を破っていく、大変重要なことですね。

平尾: 語学力はある程度自信をもって留学したんですが、実際のコミュニケーションはテクニックだけでなく、相手の意図を汲み取る必要があります。その時「語学は人なんだ」ということを痛感しました。

北村: 韓国語は英語のように高校までに勉強する機会がありませんので、大学に進学するまで殆ど韓国語がわからない状態だったんです。留学して最初のうちは向こうの人たちが何と言っているのかが分からず、間違うのが恥ずかしかったので全く喋りませんでした。韓国の方が「話さないと上手にならないよ」と言ってくれて、そして自然に理解ができるようになりましたね。とにかく自分の“殻”を破っていくことで、どんどん上達していきましたね。

留学して楽しかったこと

学長: 留学中での楽しかった思い出はありますか。

松本: 現地の人やその他の地域の友人ができたこと。そしてその友人の祖国に行き、現地の“生きた情報”を得ることができたこと。これが大きかったですね。オーストラリアでは、台湾人の友人ができて台湾にも何回も行きました。台湾では何事もまず“お茶”から始まるので、そういった現地の文化についても直接聞くことができました。

北村: 私はバドミントンが好きで、留学中に韓国の大会に出て優勝したのが楽しい思い出です。

平尾: アメリカの子どもたちとの触れ合いですね。日本ではなかなか経験できないですから。それから現地でのクリスマスでの過ごし方やホストファミリーと温かい心遣いに感動しました。

留学して辛かったこと

学長: 逆に留学して辛かったことは。

松本: 農場で働いていたんですが、現地のウイルスに感染して高熱を出してしまいました。そして病院で治療したのですが、それが保険の効かないものだと言われて……。結局約6万円の医療費を自己負担することとなりました。それが痛かったですね。

学長: 日本の健康保険制度がいかに手厚いものかを実感したわけですね。

北村: 日本と韓国の考え方の違いに戸惑いました。日本の場合、相手のことを考えて遠慮しがちですが、韓国では自分のことを話さないと相手は近づいてくれない。最初はその点に苦しま

した。今は日本の友達などに“性格が変わったね”って言われるくらい積極的にになりました。



北村 美奈実

平尾：やはり大学での勉強ですね。講義はもちろんディスカッションも全て英語で行いますし、アメリカでは、発言しないとドンドン取り残されてしまう。一時は、プライドもボロボロで泣いたことも一度や二度じゃなかったです。

学長：私は1987年から2年間、研究のためにカリフォルニアの大学にいました。日本では「サマータイム」という言葉がありませんが、アメリカではそれを「Daylight Saving」ということを知りませんでした。そしてその開始日に出勤したところ、普段一番乗りのはずなのに既にスタッフが全員いた。また、子供達も学校へ登校したところ既に門が閉まって入れなかった、なんていう苦い思い出があります。

留学を通じて成長したこと

学長：留学を終えて、自分が成長したと思うところは何ですか。

北村：留学してみて自分が周りに流されなくなりました。韓国の女性はいい意味で本当に強いんです。

松本：実際に海外に出て様々な人種の人と話してみて、その国の歴史や文化、ものの考え方が全然違うことが分かりました。それが人との付き合い際の参考になりました。“ああこんな考え方もあるんだ”って。

平尾：人に感謝を伝えることの大事さを学びました。アメリカでは、家族間で普通に「I love you.」って言うんですよ。友人同士でも手紙で具体的に感謝を伝え合ってます。だから僕も日本に帰ってきてからは、これまで恥ずかしかったこともちゃんと伝えられるようになりました。

留学を踏まえた今後のキャリア形成

学長：留学経験を活かして今後どのような進路を目指そうと思えますか。

平尾：これまで地域の人に支えられてここまで来られたので、後輩にそれを伝えていきたいと思えます。また青年の船の経験で思ったのですが、国際交流は別に東京や大阪だけでなく地方と地方の交流があってもいいのではないかと思います。そういった意味で“熊本から世界”を強く意識するようになりました。4月からは肥後銀行に勤めることとなりますが、世界を目指す地元企業や熊本に進出する外国企業の金融面でのお手伝いができればと考えています。

学長：まさに「地域に生き、世界に伸びる」人材ですね。

松本：4月から6次産業化を目指している飲食系企業に行くことになっていて、早速今度カリフォルニア州アーバインにできる新規店舗のスタッフの募集に手を挙げました。アメリカに行けたら、是非現地アメリカでの生産者の考えなどを日本での店

舗経営にフィードバックして、一企業の努力により日本のこれまでのやり方の“殻を破る”ことができたらと考えています。

学長：まさに大学が今進めている「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に直結する考え方ですね。

北村：まだ具体的なビジョンは持っていませんが、韓国では日本のことは知っていても熊本のことを知らない人が多いですね。そこで是非韓国をはじめ外国の人たちにもっと熊本を知ってもらえるような仕事をしてみたいと思います。

後輩へのアドバイス

学長：これから海外にチャレンジする後輩達にメッセージを。

松本：日本では一般的に18才で大学に入り4年で卒業するのですが、僕のように1~2年留年して外国で見聞を広めるというやり方もある。全てが“リスク”を伴うんだということを自覚して主体的に行動して欲しいと思います。友達みんな履修する授業も実はリスクなんだと。チャレンジするにあたっては、是非その点を踏まえ後悔のないようにしていただきたいと思います。



松本 幸太

平尾：何事も気になったら自分の足で見に行く心構えが大事だと思います。自分は熊本を世界にアピールして、地方の学生も頑張っているんだというところを見せたいという思いから、東南アジア青年の船に参加しました。そういう積極的な気持ちを持って何事にも主体的に臨めば後悔しないと思います。

北村：金銭面や大学の履修面での不安はありましたが、不安より得たものの方が大きかった。だから同じ悩みを持つ後輩には是非“悩むよりまず前に進んでみて!!”と言いたいです。韓国では徴兵制があり、就職状況も日本に比べ大変厳しいですが、果敢に休学して見聞を広げています。1~2年のロスは、得たものに比べたらそれ程大きくはないと思います。

学長：日本では、ストレートで進学することが優秀とされがちですが、世界では非常識。一方大学は、社会人を経験した者が在籍するなど多様性のある所です。皆さん方が周りの後輩にそのような新しい風を吹き入れていただけたらと思います。本日は、有意義なお話を聞くことができました。大変ありがとうございました。



古賀学長



世界に伸びる

海外の大学との 学術交流協定の現状

世界に伸びる

海外の大学と学術・学生交流を実施するため、6カ国の11大学と学術交流協定を締結し、以下のような活動を推進しています。

1. 学術資料・刊行物及び情報交換
2. 職員・研究者交流
3. 学生交流
4. 共同研究や研究集会の実施

【本学との学術交流協定締結校】

- H15. 7 海洋大(韓国)
- H15. 11 ワライラック大学(タイ)
- H17. 4 広西大学(中国)
- H18. 6 国立台北科技大学(台湾)
- H23. 6 開南大学(台湾)
- H23. 6 ソウル市立大学(韓国)
- H23. 9 ラトガス大学(米国)
- H25. 2 カセサート大学(タイ)
- H26. 4 モンタナ州立大学ボーズマン校(米国)
- H27. 9 ブラウィジャヤ大学(インドネシア)
- H28. 1 中原大学(台湾)

タイ、カセサート大学水産学部 (学術交流協定締結校)との 共同研究について



環境共生学部長
堤 裕昭



Suriyan Tanukijjanukijji水産学部長と一緒に作業している様子

タイの首都バンコクにあるカセサート大学との共同研究の一環として、Suriyan Tanukijjanukijji水産学部長やChittima Aryuthaka准教授らとともに、マイクロバブル発生装置を用いたエビ養殖技術向上のための研究を進めてきました。

昨年5月12日から5月17日の6日間、同学部附属のカロンワン水産研究所にあるエビ養殖実験用の池において、現場担当者らとともに水質環境の管理及び生産効率の改善のための共同作業を行いました。

同大学は、農業を基盤とする国立大学として1943年に設立され、タイを代表する総合大学の1つに成長してきました。特に農業工学分野での評価が高く、タイ国内や日系大手食品メーカーとの共同研究などが進められており、食品加工装置、包装実験装置などが整備されていることから、教育研究等に活用されていました。

同大学との学術交流協定が締結されたことを受け、以上のような共同研究をはじめ学術交流が進められておりますが、今後も引き続き環境や農林水産業の分野において、本学との共同研究や国際交流を進めていきたいと考えています。

活 | 躍 | す | る | 卒 | 業 | 生 |



熊本赤十字病院
人事課

いでた ゆりあ
出田 悠里愛さん

文学部 日本語日本文学科卒
(平成27年3月)

自分で考える習慣を身につけたことが、 現在の社会人生活でも役立っています。

社会人1年目にも関わらず、“活躍する卒業生”にて紹介させていただく機会を頂き、まだまだ活躍できていないのという思いを胸にペンをとっています。「ふむ、こういう道もあるんだな」とエッセイを読むように気楽に見ていただけると幸いです。

私は現在、県立大の道向いにあり、県大生なら誰でも目に入る、熊本赤十字病院の人事課で働いています。人事課では、1400名以上の職員が安心して業務を行えるようサポートすることが主な仕事です。具体的には、その名の通り採用退職の手続きはもちろん、みんな気になる給与に関する業務や職員の皆さんがより仕事をしやすくするため福利厚生を提供などを行っています。業務内容が多岐に渡るため、日々勉強の毎日です。もちろんうまくいかないことも多く、時には涙することもあります。しかしたくさんの職員の方々に頼りにされ、自分が頑張った仕事が喜ばれたり、ありがとうと言ってくれた時などは喜びもひとしお、非常にやりがいを感じる瞬間です。

さて、参考になるかはわかりませんが、私の大学生活を少し振り返ってみたいと思います。所属していた日本語日本文学科では、近代文学を専攻しました。作

家の書いた文章を読んで生まれた沢山の疑問から課題を設定し、解決に向けて資料やデータの収集、分析を行うのが主なスタイルです。正解を見つけるのが難しく、いかに妥協を許さずに取り組むかという闘いのなかで、物事に取り組む姿勢を学びました。これはおそらく社会人になれば誰にでも必要な姿勢です。社会に出ると学校のように丁寧に答えを教えてもらえるはずもなく、またその正解も人によって異なるため、様々な角度から物事を捉える必要があります。私もまだまだできていない部分ではありますが、学生時代に試行錯誤して自分で考える習慣を身につけたことが、現在の社会人生活でも役立っています。

他にも、学園祭の実行委員を務めたこと、キャリアセンターで就職アドバイザーとして活動したこと、様々なアルバイト経験など大学時代に挑戦したすべてのことが、今の自分の糧になっています。大学生活は短いです。後悔のないように、自分自身としっかり向き合い過ごしてほしいと思います。私も今後、本当に“活躍する卒業生”となるべく、社会人生活をがむしゃらに歩いて行くことを誓います。

熊本産で健康に

食品栄養機能学研究室

環境共生学部 准教授 友寄 博子

プロフィール／九州大学大学院生物資源環境科学研究科博士後期課程修了。
博士(農学)。管理栄養士。平成14年より本学教員、平成27年より現職。



私が専門としている栄養学は不足を補うことから始まり、過剰を是正し適切な摂取とは何かを追及する学問です。また、栄養素は食品という形で摂取しますが、食品には栄養素以外にも未知の成分が存在しています。その未知の成分や機能に注目して、ヒトの健康に役立つ研究をしています。農業県である熊本県は生産物の差別化が重要であり、その一助となるよう研究成果を提供してきました。本稿ではこれまでの研究の一部をご紹介します。

『あぶら』について

『あぶら』というと誰も食べてはいけない栄養素だと思いがちです。確かに、『あぶら』を食べすぎれば生活習慣病になります。しかし、実は必須脂肪酸という摂取しなければいけない『あぶら』があるのです。日本人の長寿の秘訣の一つとして魚食が挙げられますが、魚の『油』にあるn-3系脂肪酸のEPAやDHAが日本人の健康を保ちました。逆に飽和脂肪酸が多い動物の『脂』は摂りすぎれば生活習慣病を引き起こします。魚油を摂れば健康維持に繋がるのですが、現在の漁獲高の減少、魚の水銀汚染を考えると、魚だけに頼れないのです。

次世代のn-3系脂肪酸研究

そこで、魚油に代わるn-3系脂肪酸として注目されているのが α -リノレン酸です。通常n-3系脂肪酸は陸上生物から得ることは難しいのですが、アマニとエゴマとい

う植物の種子は α -リノレン酸を多量に含有しています。そして、幸運なことに熊本県の中山間地ではすでにエゴマが広く栽培されており、無農薬・無肥料での栽培が可能で、新しい油資源として注目を集めています。本学でも昨年松添研究室の協力を得て、無農薬栽培が可能であることや採取したエゴマ種子に α -リノレン酸が多く含まれていることを確認しました。また今年度は熊本県産のエゴマ油を使って、肥満・糖尿病マウスへの影響について検討しており、良い効果が得られることを期待しています。

最後に

今回はエゴマを取り上げましたが今までは海苔を、本年度から新たに晩白柚について研究をスタートしています。今後も様々な熊本県産の農水産物の新たな健康機能性を明らかにすることで、皆さんの健康に貢献していきたいと考えています。



活動状況写真(地域連携型卒業研究学生グループ 友寄ZOO)



国際交流

INTERNATIONAL EXCHANGE 

インドネシア・ブラウイジャヤ大学とMOUを締結

9月26日、本学とインドネシア共和国のブラウイジャヤ大学は、両大学の教育と研究の発展を目的としたMOU(学術交流に関する覚書)を取り交わしました。

調印に際しては、古賀学長をはじめ文学部の馬場教授らが当該大学を訪問し、Mohammad Bisri学長以下約15名の教職員から温かい歓迎を受け、懇談を行いました。

これまで日本語教育分野での交流がありましたが、このMOUをきっかけに、今後はさらに多様な分野での交流が実現しそうです。



※MOU…Memorandum of Understanding(学術交流に関する覚書)

モンタナ州立大学ボーズマン校国際部長が古賀学長を表敬訪問

10月14日、モンタナ州立大学ボーズマン校から、David Di Maria国際部長以下5名の訪問団が古賀学長を表敬訪問しました。

訪問団は、古賀学長および文学部の村尾教授をはじめとする関係教員らとともに、本学学生の受入や教員の交流について意見交換を行った後、学長主催の昼食会に出席し、和やかな雰囲気の中で懇談を行いました。今後も継続的な交流が期待されます。



留学生向け「学モン都市くまもとツアー」を開催

熊本県内の大学で構成される「大学コンソーシアム熊本」の主催により、9月28日、熊本での進学を目指す留学生向けのミニ・オープンキャンパスが開催されました。

本学には、福岡や宮崎より本学への進学を希望する38名の留学生が訪れ、大学紹介や先輩留学生によるスピーチ、キャンパスツアーなどに参加しました。

参加留学生は、実際のキャンパスの雰囲気に触れ、本学への興味・理解をより深めることができたようです。



本学を含む県内8大学等が 文科省のCOC+事業に選定

本学を含む県内8大学等が地方公共団体や企業等と協働して、地域の産業育成や雇用創出、学生の地元定着を進める「“オール熊本”で取り組む熊本産業創生と雇用創出のための教育プログラム」が、文部科学省の平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に選定されました。

この事業のスタートとして、11月4日、くまもと県民交流館パレアにおいて「COC+キックオフシンポジウム」が開催されました。熊本大学や本学、九州看護福祉大学、熊本学園大学、尚絅大学・尚絅大学短期大学部、崇城大学、東海大学、熊本高等専門学校との8校をはじめ、熊本県工業連合会、熊本県農業協同組合中央会等の経済団体や熊本県などの関係者が参加しました。

シンポジウムでは、日経BP特命編集委員 宮田満氏による特別講演や、各校の学長が参加したパネルディスカッションなどが行われました。



「くまもと県南 フードバレーフォーラム」を開催

本学と八代市の共催で、11月21日、八代市鏡文化センターで「くまもと県南フードバレーフォーラム」を開催しました。本学と包括協定を締結する八代市を中心に進められている「くまもと県南フードバレー構想」を支援するために、平成26年から取り組んでいるものです。今回は、八代地域の特産品であるトマトなどを活用したビジネスの創出や地域活性化について、講演や発表が行われました。

カゴメ(株)イノベーション本部自然健康研究部の菅沼大行部長が、トマトの生体調節作用、健康や美容などへの効果について基調講演を行ったほか、本学の学生が中心となって取り組んでいる地域連携型卒業研究(学生GP)の中間報告も行われました。友寄研究室からは、晩白柚の果皮には糖質の吸収を抑える効果が期待できるとの報告が行われ、小菌研究室からは、八代産の食材を使ったピザで地域振興を図る「ピザ@やつしろ」の活動について報告がありました。また、会場では、「くまもと県南フードバレー構想」に関するパネル展示や「ピザ@やつしろ」の試食会なども行われました。



包括協定自治体が学園祭でPR

本学と包括協定を結ぶ玉名市、人吉市、相良村の3つの自治体が、本学恒例の学園祭「白亜祭」(11月14日～15日)にブースを出展し、それぞれの自治体を持つ魅力をPRしました。

今年で3年連続の出展となる相良村は、毎年販売され好評を博している特産品の挽き茶や、今回初お目見えとなるお茶を使ったスイーツなどを販売しました。人吉市のブースでは、球磨地域の特産品であるお茶をより深く知ってもらおうと、数種類の茶葉の中から自分好みのお茶を選ぶことのできる試飲会が行われました。

また、玉名市からは、昨年の「玉名大俵祭り」のグルメグランプリで優勝した「あか牛阿蘇バーガー」が出店し、連日行列ができる賑わいをみせました。



包括協定市町村との 連絡会議を開催

本学と包括協定を結ぶ県内18の市町村が参加した連絡会議を、11月27日、CPDセンターで開催しました。各市町村の担当者と地域おこし協力隊員計32名が参加して、情報交換などを行いました。

今回は、近年多くの自治体で採用されている「地域おこし協力隊」をテーマに、各自治体の現状や課題について意見交換を行ったほか、地域おこし協力隊員の経験を持つ本学の佐藤特任講師や、自ら「地域おこし協力隊祭り」を主宰する環境共生学部の柴田准教授からは、地域外から来る隊員に対する地域や行政のサポートの在り方等について提言が行われました。

また、山都町や小国町の担当者からは、過疎対策の一環として最近特に注目を集めている「移住・定住」に向けた取組事例についての報告がされるなど、有意義な情報交換やネットワークづくりを行うことができました。



高大連携～高校生と協働で 取り組む「食育の日」

本学では、長年にわたり、様々な食育活動に取り組んでいます。その一つが、環境共生学部食健康科学科の学生が中心となってメニューを考案し、学食のランチとして提供する「食育の日」です。

11月17日に開催した「食育の日～高大連携」では、熊本農業高校の生徒と本学の学生が協働で作上げたオリジナルレシピを学食のランチとして提供しました。レシピは、高校生たちが考案したメニューに、本学の学生が栄養面や食品の組み合わせについてアドバイスをして作り上げたもので、材料には、高校生たち自らが学校で育てた野菜や米がふんだんに使われ、できあがった「元気いっぱいメニュー」はとても好評でした。

高校生たちにとっても、実践を通して大学での学びに触れることのできる貴重な機会となりました。



地域を訪れ、 地域の食や歴史を体感する 「郷土料理伝承現地ツアー」

本学の学生が地域に出向き、地元の郷土料理を「くまもとふるさと食の名人」から直接学ぶ、「郷土料理伝承現地ツアー」を、8月に山都町、9月には大津町で開催しました。郷土料理がはぐくまれた地域に足を運び、調理法を実際に学び、自分たちが調理したものを味わうことで、地域のすばらしさや地元の方々のあたたかさを体感することができました。ツアー終了後は、ツアーに参加した学生が、未体験の学生たちに郷土料理の魅力を伝える機会も設けており、学生同士の間でも郷土料理の輪が広がっています。



大学の動き

熊本県立大学国際シンポジウム2015 「日米中関係の新展開～中国の台頭とアジア太平洋秩序」 を開催

11月7日(土)、ホテル日航熊本において、エズラ・ヴォーゲル米国ハーバード大学名誉教授(東アジア政治)をはじめ、國分良成防衛大学校長(中国政治)や久保文明東京大学教授(アメリカ政治)という、日米中関係の世界的に著名な研究者3名をお招きして、標記シンポジウムを開催しました。

当日は、ヴォーゲル氏による講演会のほか、五百旗頭理事長をコーディネーターとした上記3名によるパネルディスカッションが行われ、中国の台頭による激動の東アジア情勢の最新情報や今後の日本の対処すべき課題などに、本学学生のほか、一般から参加者約700名が熱心に聞き入っていました。



左上:ヴォーゲル氏 右上:五百旗頭理事長
左下:國分氏 右下:久保氏

夏目漱石来熊120年 並びに 没後100年記念イベント シンポジウム「漱石の心と思想」を開催



文学部では11月22日(日)、半藤英明教授をコーディネーターに、標記シンポジウムを開催しました。

和洋女子大学教授・仁平道明氏の基調講演、京陵中学校教諭・西村り氏による特別発表に続くパネルディスカッションでは、発表者として仁平氏に加えて漱石旧居館長・小原啓介氏、日本語日本文学科から木村洋・五島慶一の両准教授、質問者として鈴木元教授を加え、活発な議論が行われました。当日は、本学学生・一般から約350名もの参加があり、〈文豪〉の「人となり」や「文学」をたどるプログラムに聞き入りました。

次期学長に半藤英明教授を選考

古賀実学長の任期が平成28年3月末に満了することに伴い、学長選考会議において昨年6月から次期学長の選考を進めておりましたが、11月9日(月)、文学部の半藤英明教授(学術情報メディアセンター長)を次期学長に選考したと発表しました。任期は平成28年4月1日から平成32年3月31日までの4年間です。

次期学長 半藤英明教授 プロフィール

昭和35年生まれ、博士(文学)
専門は日本語学
大学院文学研究科長、副学長、
学術情報メディアセンター長
を歴任



次期学長予定者発表記者会見(11月9日)

熊本県立大学未来基金への御協力に、 心よりお礼申し上げます。

寄附者御芳名（平成27年7月1日～12月31日）（注）

個人3件、法人・団体等2件、古本募金6件の御寄附を
いただきました。（敬称略）

500万円 西部電気工業株式会社（奨学金として）
200万円 同窓会紫苑会（奨学金として）
50万円 福島 英生
お名前のみ 黒木 誉之
古本募金 三浦 章（3件）

※お名前の掲載を希望されなかった方 個人1件、古本募金3件

（注）古本募金については、6月1日から11月30日までに御寄附いただいた分です。

基金創設（平成21年9月）以来の寄附金総額は、
127,168,884円（申し出分を含む）となりました。

未来基金ニュース

◆基金を活用した奨学金の平成27年度支給決定状況は次のとおりです。（平成27年12月現在）

- ・西部電気工業奨学金 18名
- ・同窓会紫苑会奨学金 10名
- ・短期派遣留学生支援奨学金 1名
- ・小辻梅子奨学金 2名



◆「熊本で世界と向き合う」国際化事業として、熊本県立大学国際シンポジウム2015「日米中関係の新展開」の開催にあたり、東アジア研究の権威であるエズラ・ヴォーゲル氏ら講師・パネリストの招聘費用に基金を活用しました。

皆様からの御支援、御協力をお願い申し上げます。

古本募金に御協力ください

不用の書籍、CD、DVDを御寄附いただき、熊本県立大学未来基金において、本学の教育研究に役立てる取組です。ぜひ御協力ください。

<インターネットでの申込みの場合>

梱包

書籍、CD、DVDを段ボール箱に詰めてください。（インターネットでの申込みの場合、申込書の封入は不要です。）



申込

「熊本県立大学 古本募金」ホームページのお申込みフォームに必要事項を入力してください。



発送

指定のお時間に宅配業者が伺います。5冊（点）以上は送料無料です。

※提携会社バリューブックスにて買い取られ、その売却代金が「熊本県立大学未来基金」へ寄附されます。

※電話での申込みも可。バリューブックス0120-826-292へ。「熊本県立大学 古本募金」とお伝えください。

詳細はホームページへ

<http://www.furuhon-bokin.jp/pu-kumamoto/>

熊本県立大学 古本募金

検索



後援会便り

後援会とは

- 本学学生の保護者又はこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果を上げることが目的としています。



アメリカの高校の日本語クラスにおける日本語教育実習の様子

後援会では国際交流推進事業として海外留学・研修等にかかる渡航費の一部を助成しています。海外協定校への留学・研修・学術交流の他にも、ゼミ団体の海外研修や私費での留学、海外ボランティアへの参加や日本語教育実習での海外研修（写真）など、毎年多くの学生が利用しています。現地学生との交流や、異文化に触れたり、自分を見つめ直すきっかけになったりなど貴重な経験ができる学びの機会には是非チャレンジして欲しいと思います。

後援会の事業

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座（公務員試験対策講座、就職活動実践講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、秘書技能検定対策講座等）受講料の助成又は開催経費の助成
- PROGテスト（社会人基礎力の測定）の実施支援、TOEIC®IPテスト開催の支援及び受検料の助成、各学部による就職支援事業開催経費の助成、資格取得者への助成 等

《教育研究推進事業》

- 共同自主研究への助成
- インターゼミナル大会等への参加助成 等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。

まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業を御理解いただき、是非御加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。

《国際交流推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の助成
- 留学対策講座の受講料の助成
- 協定校研修団への授業・日本文化紹介等経費の助成 等

《学生活動支援事業》

- 各サークルの活動費・白昼祭開催経費・全国大会出場経費等の助成
- 学生用コピー機の設置、コピーカード販売
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置
- 防犯対策用ブザーの無料貸出し 等

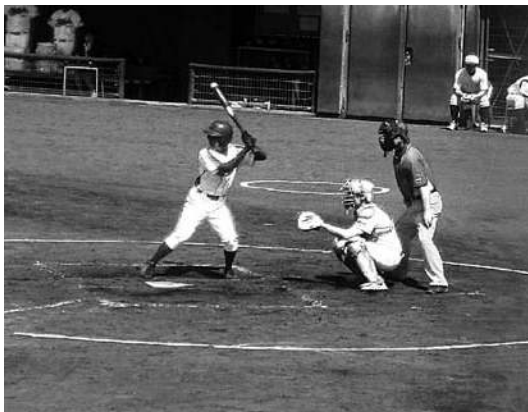
軟式野球部活動報告



私が所属する熊本県立大学軟式野球部は、8月に長野県で開催された第38回全日本大学軟式野球選手権大会に2年ぶりの出場を果たしました。九州地区リーグ(予選)では、1位で通過したものの、全国大会では惜しくも終盤に逆転され、初戦敗退という結果になりました。

今回のような全国大会への出場は珍しい事ではありません。少し歴史を遡りますと、平成6年に同好会が創設されており、2年目には全国大会初出場を成し遂げています。今年は、創部20年目(2年間の同好会を除く)の節目を迎え、より一層周囲の期待に応えるべく、日々練習に励んでいます。部としての歴史は長いものではありませんが、高校3年間を野球に励んできた学生や野球未経験ながらも何かに打ち込みたい学生が一同に集い、全国の舞台を目指して切磋琢磨した努力の結果が、部員全員にとって貴重な経験となりました。

また、歴代の軟式野球部OB・OGが団体を結成のうえ、用具の購入など手厚い御支援をいただいております。こういった御支援もあり、また近年は“全国大会出



総合管理学部
総合管理学科
3年

丸山 喬大

場”が至上命題というプレッシャーの中、11月には、後輩たちが中心となって第32回西日本大学軟式野球選手権大会に連続出場を果たすことができました。

一方軟式野球部員には、他部を掛け持つ学生が増加しています。特に3年生は、軟式野球部と陸上部を兼ねた学生が多く、12月には、第33回九州学生駅伝対校選手権大会へ初出場という陸上部の歴史に残る偉業を成し遂げました。決して、強い選手が揃っているわけではありませんが、日々の努力で掴んだ3年越しの切符は、仲間との絆に改めて気付かされる良い機会となりました。

当日のレース(駅伝)は、これまでの辛い練習や過去の苦い思い出がよぎる中、仲間への感謝を込めた襷を繋いだ夢のような時間となりました。



野球部員にとって陸上部との“兼部”は、野球技術の基礎固めやチームプレーという面において大変有意義なものでした。

これからも、軟式野球部が活躍を続けて、全国の舞台で勝ち進むことができるレベルの高いチームへと成長できるよう頑張っていくとともに、多大な御支援をいただいたOB・OGの方々を見習って、後輩の活躍を全力で支援していきたいと思っております。

人事情報

採用 (平成28年4月1日付)

[環境共生学部]
居住環境学科 准教授 田中 昭雄
食健康科学科 教授 下田 誠也
[総合管理学部]
総合管理学科 地域・福祉ネットワークコース 教授 江崎 一郎
総合管理学科 パブリック・アドミニストレーションコース 准教授 三田 知実

就任 (平成28年4月1日付)

[学長] 半藤 英明
[副学長] 津曲 隆(再任)
[学部長]
文学部長 砂野 幸稔(再任)
環境共生学部長 松添 直隆
総合管理学部長 黄 在南(再任)
[研究科長]
文学研究科長 鈴木 元(再任)
環境共生学研究科長 北原 昭男
アドミニストレーション研究科長 宮園 博光
[センター長]
地域連携・研究推進センター長 堤 裕昭
学術情報メディアセンター長 村尾 治彦
[学科長・コース長]
(文学部)
日本語日本文学科長 米谷 隆史
英語英米文学科長 レイヴイン リチャード
(環境共生学部)
環境資源学科長 石橋 康弘
居住環境学科長 辻原 万規彦

食健康科学科長 白土 英樹(再任)
(総合管理学部)
総合管理学科 パブリック・アドミニストレーションコース長 進藤 三雄
総合管理学科 ビジネス・アドミニストレーションコース長 森 美智代
総合管理学科 情報管理コース長 飯村 伊智郎
総合管理学科 地域・福祉ネットワークコース長 荒木 紀代子
キャリアセンター長 松本 直幸(再任)
保健センター長 荒木 紀代子

昇任 (平成28年4月1日付)

文学部 教授 飯村 英樹
文学部 教授 中井 賢一
文学部 准教授 小川 晋史
文学部 准教授 崔 文姫
環境共生学部 教授 北野 直子
環境共生学部 准教授 吉村 英一
総合管理学部 教授 上拂 耕生
総合管理学部 准教授 飯島 賢志
総合管理学部 准教授 河西 卓弥
総合管理学部 准教授 佐藤雄一郎
総合管理学部 准教授 土居 俊平

退職 (平成28年3月31日付)

学長 古賀 実
文学部 教授 三木 悦三
文学部 准教授 清水 啓子
環境共生学部 教授 福島 英生
環境共生学部 准教授 西 英子
環境共生学部 助手 高野 優
総合管理学部 教授 明石 照久
総合管理学部 教授 石橋 敏郎
総合管理学部 教授 税所 幹幸

おすすめの1冊



著者：川原繁人
岩波書店 (平成27年11月)

「音とことばのふしぎな世界——メイド声から英語の達人まで」

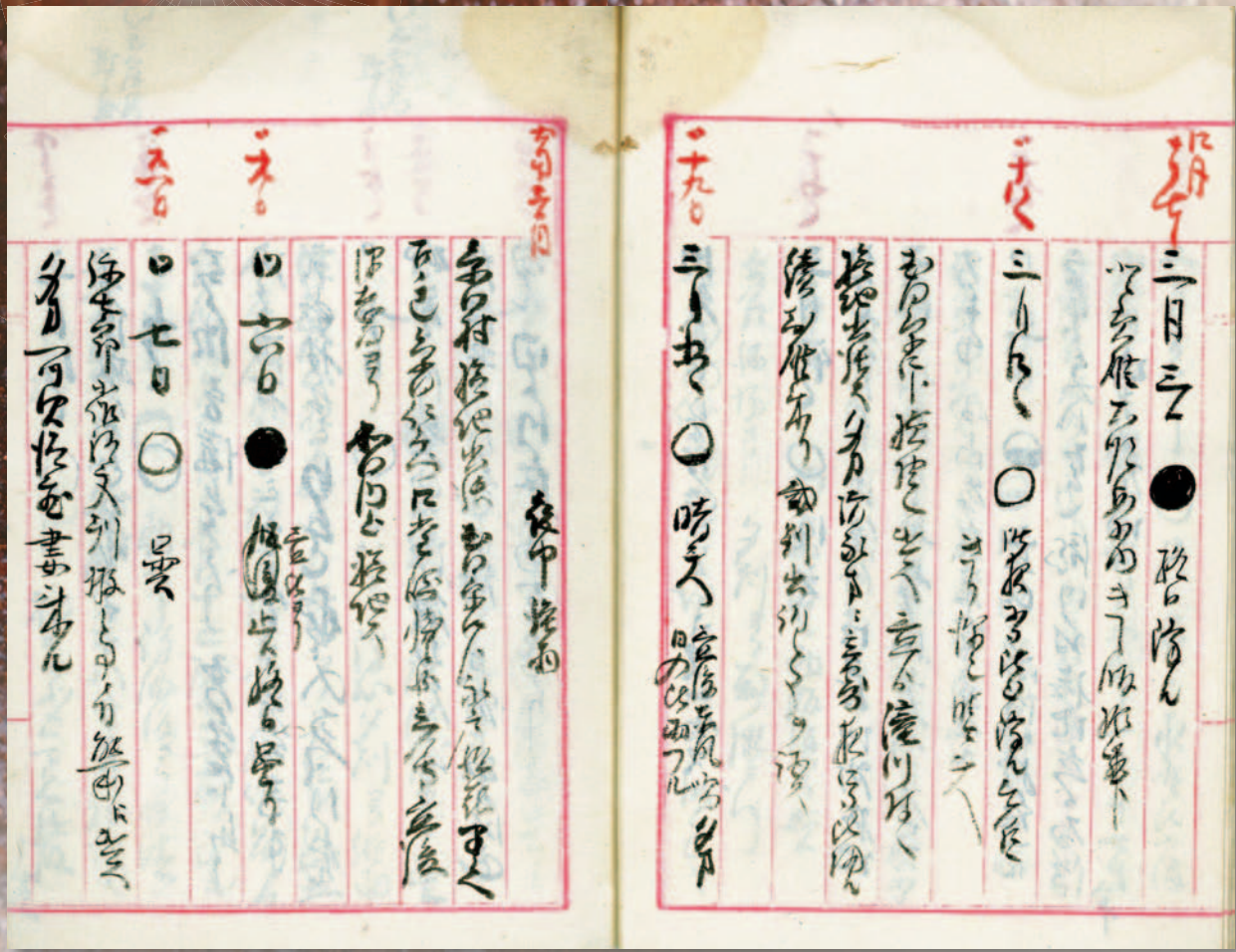
音声学という学問の名前をどれくらいの人が聞いたことがあるでしょうか。きっとイメージがわからない人が多いことでしょう。そのような人が音声学に触れるきっかけとして、本書は最高の1冊と言えます。著者は世界的に有名な若手の音声学者なのですが、本書の内容は専門書のような堅苦しいところが全く無く、とても楽しく読み進めることができます。B6版で100ページ程度という小さい本の中に1~2ページで完結するトピックがたくさん詰め込まれているという構成も、初心者向けになっていて読みやすいです。どんなに文字が苦手な人であろうと、眠くなる暇もなく1つのトピックを読み終わるはずですよ。

「メイド声」「ラップ」「五十音図」から「福祉」まで、著者の持つ幅広い知識の中から次々に繰り出される題材に、きっと驚かされることでしょう。そして本書を読み終えた時には、音声学という学問についての基本的な部分を理解できているはずですよ。ことば(言語)に興味がある人には特にお勧めしたいです。

文学部 講師

小川 晋史





富永三十郎「明治十八歳次乙酉記録」

本学には約7,000点と目される「富永家文書」が所蔵されている。この富永家は、上益城郡白旗村（現甲佐町）の豪商で、貴族院議員・富永猿雄を輩出した名家として知られる。近世後期に造酒業や廻船業で財を築いたようだが、幕末から近代にかけて、特に富永三十郎（1829-1910）の代に、いわゆる「寄生地主」として莫大な土地を獲得したことで知られ、その所有地だけを通して現在の甲佐町から熊本市内まで行けたという逸話が伝えられている。

ところで、残された史料の整理保管体制や内容には、富永三十郎が一方ならぬ「記録魔」であったことが見て取れる。例えば、膨大な数に上る各種証文、書翰、日記等は、年度ごとに袋を拵えて管理的に収納しており、そこには未開封の書翰まで納めているほどである。ことに質地証文に至っては、返済があるごとに領収の写しを全て皆済まで貼付し、一つの証文の行く末が完全に把握できるように作成しており、その綿密さには誰もが舌を巻く。

また、20年以上にわたって一日も欠かさずつけた日記にもその「記録魔」ぶりは如何なく発揮されている。年中行事、人的交流、金品の授受、正月や集会時の献立等、様々な興味深い事項が、簡潔ではあるが漏れ無く記されている。中でも注目したいのは、日々の天候についての記載である。

旧暦の日付（頭欄には太陽暦）で綴られた三十郎の日記は、必ず天候について

の記号と説明から始まる。記号は三十郎が独自で考案したもので、○なら晴天、●なら雨天、通り雨等、一日のうちにわずかな時間の降雨があったり、また、それが何度も起こったりした場合は、降った時刻と時間分を○に黒線で示している。この記号の下に天気の詳細が添えられる。

本紙面で取り上げた明治18年次分は、現存する三十郎の日記のうち最初期のものであるが、写真の右頁の最左行「三月五日」項の記号を見ると、白丸の半分より下側が黒く塗られている。一体どういふことか。

三十郎が付した説明文を読んでみよう。「晴天」と記した後に、割注で「【屋後東風吹夕方日入比雨フル】」との補足がある。これを踏まえて、日の出から日の入りまでを○とし、その最上方を日の出、最下方を日の入り、さらに上方から下方にかけて時刻が経過するものと理解すれば、晴天だった一日の日暮頃に降雨した状況を的確に示そうとした結果、かかる表現になったものと合点が行く。

かくして富永三十郎の日記は、幕末明治の土地集積のあり方や商売の実情、あるいは交友関係等を明らかにするのみならず、熊本の一地方の20年以上にわたる気象史を伝える垂涎の史料でもあるのである。

解説：文学部 准教授 大島 明秀

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
 いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
 〒862-8502（住所記載不要）
 熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
 FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
 TEL 096(383)2929(代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>

再生紙を使用しています